

結婚について語ろう

ジョン・グラント 著

family series

let's talk about
MARRIAGE

by John Grant

「結婚」について語ろう

ジョン・グラント著

伝道出版社

**Let's talk about
MARRIAGE**

by

John Grant

The John Ritchie family series

Publisher

Evangelical Publishers

Tokyo, Japan

目次

1. 今日の結婚	4
2. 結婚——神によって定められた関係	8
3. 「主にある」結婚でなければならない	11
4. ふたりはいつ夫婦になるのか	14
5. 結婚は愛の関係である	16
6. 夫の責任	21
7. 妻の責任	28
8. 「 <small>しんげん</small> 箴言」からの助言	33
おわりに	36

表紙デザイン 大野仁三
本文さし絵 山本ルツ

1. 今日の結婚

20世紀の後半にはさまざまな面で劇的な変化が起りましたが、同時に、結婚に対する人々の考えもすっかり変わりました。人々は昔の道徳的規範に異議を唱え、それを顧みなくなりました。

その代わり、結婚に関して「進んだ」考え方をするようになりました。聖書の教えに基づいて考えるのではなく、人生を自分に都合のよいものにしようとしているのです。

「夫婦になること」と「同棲すること」の違いは1枚の紙切れだけだと言われています。結婚の必要性を感じない男女が同棲し、子どもまでできたとしても、そのことが今では一般に受け入れられています。生涯を誓い合えば、あまりにも束縛されるし、「もう終わりにしたほうがいい」と互いが(あるいは、どちらかが)感じたときには、そうできるようにしておきたいのです。たとえ結婚したとしても、今日の法律では、

離婚するのは簡単なことです。何かの解約手続きをするのと同じようなものとみなされ、その結果、多くの人々が、付随する問題に十分な考慮を払うことなく、結婚に踏み切るようになりました。「離婚に伴う苦痛」と「片親しかいない家庭の問題」が増加してきているにもかかわらず、この世は何の教訓も得ることのないまま、社会の秩序と人類の利益のために神が定められたものを無視し続けています。

法律によっても、一般的な慣習によっても、結婚を無視することが容認されています。このような風潮に異議を唱える人は次のようにみなされます。「人々を、逃げ場のない耐えがたい状況に置くことを主張している、古臭い考えを持った、時代遅れの人」と。

現代の結婚観が示す社会のありさま

これらのことは、人々が生活の中から神を除外したいと思っている証



この世は神が定められたものを無視し続けている

抛です。神のことは尊重したり、考慮に入れたりすることもなくなり、その代わりに、利己的で無責任な態度が見られるようになりました。だれもが自分を第一にし、心の命じるままにするのが善いことだと考えています。気まぐれな欲求を満たすことが、どんなに無責任な結果になろうとも、一向にかまいません。自分の権利については大いに語るものの、自分の責任については口先だけという社会になりました。人々は結婚の誓いを立てるのをいやがるようになったのです。一生続くような責任は負いたくないがために。

人々は結婚の誓いを立てるのをいやがるようになった

悲しいことに、人々は神のもっとも尊い賜物のひとつを否定しているのです。無私の愛、責任ある愛を示すこと、そして愛されることは、満たされた、充実した人生を送るための大切な要素です。家庭生活という、人生でもっとも重要な分野において聖書の教えに従う人々には真の報酬が約束されていますが、現代の人々は、短期間の気軽な男女関係や結婚の誓約をしない関係によって、まさにその報酬を奪い取られているのです。

魅力的な現代流

世間では、結婚の問題や男女の関係について次のように言われています。「自分のからだなんだから、自分の思いどおりにできる」。「私たちには、すでに壊れてしまった関係、互いに苦しむだけの関係を終わりにする権利がある」。「法律に縛られるよりも、^{どうせ}同棲して愛し合うほうが、はるかによい」。このような考えにあざむかれるようでは、とても分別のある人とは言えません。「たとえ法律上夫婦でなくとも、できた子どもは『愛の結晶』だ」。「私たちは年月とともに変わるので、いま魅力を感じている人に将来も魅力を感じるとはかぎらない」。「結婚生活に最初のころの喜びがなくなった場合、ほんのしばらくの間、ほかのだれかと関係を持つことによって、結婚生活の喜びが取り戻せるかもしれない」。もちろん、結婚しなければ、それに伴う面倒なことをすべて避けることができるのです。



聖書は、結婚について、はっきり教えている

しかし、そのような考えは絶対に間違っています。聖書は、結婚について、はっきり教えています。もしそれを実行すれば、結婚は私たちの自由や行動を束縛するものではないとわかります。結婚は神が定められた男女の関係であり、それによって愛し合い、いたわり合い、尊敬し合うことができるのです。



サタンは、「神が定めたことは、自由や行動を制限するものばかりだ」と言って、常に人間をだまそうとしています。サタンはエバを誘惑し、「サタンの言うとおりにすれば、神のようになれる」という考えを彼女の心に植えつけました。制限が取り除かれた結果、アダムとエバは、さらに充実した人生を送るはずでした。それがどれほどの損害を与えたかは、人類の歴史が証明していますが、そのときのエバにとっては魅力的だったのです。けれども、彼女は、さらに充実した人生どころか、苦痛と悲嘆と真の制限が加わったことに、すぐに気づきました。神の方法を非難し、それを捨て去るとき、残っているのは、(とても魅力的に見えますが) 破滅への道だけです。結婚についても同様です。今日の社会は、聖書を無視したことに対する高い代償を払っています。結婚に対するこの世の取り組み方は、人々を幸せに導くどころか、それによって、さまざまな問題が生じています。家庭は崩壊し、当事者たちの心理的なダメージは大きく、子どもたちは片親のいない(あるいは両親のいない)不安定な生活を余儀なくされているのです。

クリスチャンに求められていること

クリスチャンは、聖書が結婚について教えていることが、今でも確かなものであるということを示さなければなりません。特別な好意を抱き、交際期間を持ち、主を尊びつつ、ふたりの愛と尊敬を育みます。そして、主が来られるまで(あるいは、死がふたりを分かちまで)自分たちが夫婦であることを知ったうえで結婚します。それが今なお神の方法です。したがって、それが今なお最善の方法なのです。

聖書の教えが、現代社会には当てはまらない時代遅れのものであることを示すために、結婚を例に挙げて説明する人がいます。けれども、聖書の教えは今日にも当てはまるものであるばかりか、結婚は今日でもふさわしいものであり、その関係において男と女は愛し合い、支え合い、安定した生活を送ることができるのです。結婚は社会の根幹をなすもので、それを捨て去ることによって、無数の問題が引き起こされ、悲嘆がもたらされます。私たちにとっては、神が定められたものが常に最善なのです。

結婚は社会の根幹をなすもので、それを捨て去ることによって、無数の問題が引き起こされる

2. 結婚——神によって定められた関係

結婚が神によって定められた関係であるということは聖書から明らかです。結婚は長年にわたって徐々に発展してきたものではなく、神から与えられたものです。人間が、社会に秩序をもたらすために最適の方法を見いだそうとして作り上げてきたものではありません。いったんこの事実を認めれば、必ず3つの結論に至ります。

第1に、人には、神が定められたことを変えたり、無視したりする権利もなければ知恵もありません。人には、結婚に代わるものを取り入れる権限はありませんし、ましてや結婚を完全に無視する権限などありません。そのようなことをすれば、危険を覚悟しなければなりません。

第2に、神は、実行できることだけを定められました。神は、現代の人々にふさわしくない関係を押しつけておられるわけではありません。「それは単なる理想にすぎない」と言うのは、「神が定められたことは年月とともにすたれる」と言っているのと同じです。クリスチャンならそのようなことを主張したりはしません。

第3に、神は、社会に秩序をもたらされたとき、ただ人の益のために結婚という関係を定められました。ですから、結婚は人を陥れる罠でもなければ、挫折し、不幸になるだけの関係でもありません。それは男女を祝福するために与えられたものです。

聖書に出てくる最初の夫婦はアダムとエバです。彼らの関係は、アダムが思いついたものでもなければ、エバによってもたらされたものでもありません。この最初の結婚には多くの教えが含まれており、その基本的な原理や原則によって夫婦の関係を律するべきなのです。

「神である主は仰せられた。『人が、ひとりでいるのは良くない』」（創世記2:18）。

神が万物をお造りになったとき、人間以外の動物は最初から群れをなすほどたくさんいましたが、人（男）はたったひとりでした。そのあとで、女が造られました。人（男）がひとりでいるのは良くなかったから

神は、実行できることだけを定められた

です。人との交わりは人生でとても大切なものであり、男女は互いにそれを与え合うのです。

女が造られたのは、男に必要な助け手となるためであった

神である主はさらに仰せられました。

「わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう」(同 18)。

女は男の伴侶であるばかりでなく、「助け手」でもあります。少しも助けにならない人と親しくなることはできますが、この女はアダムの仕事を手伝うべきでした。人生にはわずらわしいこともたくさんありますが、ともに立ち向かってくれる伴侶が時に応じて助けてくれるとしたら、さらに適切に義務を果たすことができます。

女が「彼にふさわしい助け手」であったことに注目すべきです。女が造られたのは、男に必要な助け手となるためでした。女の性質や才能はその任務にぴったりかなくなっていました。女性が持つ特徴は、男性が持つ特徴を補って完全にします。このふたつの特徴が衝突したり、対立したりすることはありません。夫婦の愛の関係が完全なものとなるのは、男女双方のうちに神から与えられたものがあり、それによってさまざまな状況に対処できるからです。女性の社会進出が遅れているのは、男性が優位に立ってこの社会を動かしているからです。女に限界があるのは(実際には、そのような限界はありませんが)、子どもを産むことができるからでもなく、生まれた子どもを育てるためでもありません。このような考えほど真理から遠いものではありません。女は、男の助け手となって、(夫と持った関係の結果授かった)子どもを産み、育てるといふ仕事に最適な者として造られたのです。



アダムがエバを見だし、結婚を申し込んだのではありません。「神である主」がエバをアダムのところに連れて来られたのです。神が最初の結婚をお膳立てされたのです。これが後のすべての子孫のためであったことは、24 節のことばからわかります。「男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである」。アダムとエバには父も母もいなかったのですから、このことばは彼らには当てはまりません。結婚

結婚は、あらゆる時代のすべての人のためのものである

は、あらゆる時代のすべての人のためのものであることを、このことばは示しています。

先のみことばのとおり、結婚には「妻と結び合う」ことも含まれます。結婚するときには誓約をします。「死がふたりを分かちまで」いっしょに暮らすつもりがないなら、結婚生活を始めてはなりません。これはとても重要なことなので、ここで、はっきりさせておきましょう。神は「離婚を憎む」お方ですから（マラキ2:16）、クリスチャンは離婚を考えることすらしてはなりません。人生にはさまざまな困難や問題があるでしょうし、輝いていた最初のころの愛が失われてしまったように思えるときもあるでしょう。しかし、結婚は「取り組むべきもの」であり、「おろそかにできないもの」です。愛を深めることができるのは、さまざまな困難に共に立ち向かうことができると気づいた人たちです。

したがって、結婚は明らかに神が承認されたものであり、人は、主によってもたらされたものを注意深く守るべきです。結婚は、今日とは違う、より原始的な社会に住んでいた人たちのためだけのものではありません。「結婚はもう役に立たなくなった」と言うことはできませんし、今も無視することはできません。結婚は神が与えてくださったものであり、それに代わるものはないのです。

クリスチャンは離婚を考えることすらしてはならない

結婚は明らかに神が承認されたものである